
最強の保険医

竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の保険医

【Nコード】

N3601T

【作者名】

竜司

【あらすじ】

生と死の狭間に迷い込んでしまった主人公。生と死の狭間からは、普通の人間では出る事が出来ないので、主人公は幼女と機工魔術士の契約をして別世界に行く。

そんな話です

作者はかなり文才がありません

キャラ・原作崩壊などがあります

それでも良い方は宜しく願います

プロローグ

「……てなわけですっ！」

今日の前に金髪の幼女が（残念な）胸を張って説明してくれた
普通に寝たはずが、知らない世界（真っ白な世界）に居たんだわ
しばらくすると幼女が来て説明してくれた

「あー……うん……」

簡単に言うと、俺は生きたまま生と死の狭間に迷い込んでしまったらしい
しかも、幼女達の手違いで

「自分達の失敗を自慢気に言われてもな」

「あう……すいません」

シヨボンとする幼女

「んで、俺はどうなるの？元の世界に戻るの？このまま死ぬの？」

ちよつとなげやり気味に、頭を掻きながら言う

「えっと……元の世界では死亡扱いになってるので、戻ること
は出来ません」

幼女がぼしょぼしょと小さい声で言う

「じゃあ、死ぬのか？」

「いえ！貴方には別の世界に行ってもらいます！」

別の世界？

噂？の平行世界とかかな？

「ふ〜ん・・・今更だけど、あんた何？人間じゃないよね？」

なんか変な力を感じるんだよね

神々しいような、禍々しいような力をね

「よくわかりましたね！普通人間は、自分より上位の存在を認識出来ないのに！」

びよんぴよんと飛び跳ねて驚く？幼女

「で、・・・何者？」

「魔王サタンです！またの名を大天使ルシファーといいます」ドヤ顔

・・・あれ？

予想では神とかだったんだけどな（汗）

こんな無邪気な表情で見えてくる幼女が、魔王とか想像もつかないんですけど

怒らせる前に早く居なくなっただ方が良いな！

「どうしたんですか？顔色が悪いですよ？」

「何でもないですよ！」

ヤバイ！

顔に出てたみたいだ！

「何で急に敬語になるんですか？」

笑顔が怖い！？

何故だ！

敬語じゃ駄目なのか！？

話を戻そう！

「別世界に行くって言ったけど、どうやって行くの？」

「普通の人間が、この世界から出ることは出来ません」

俺って一応普通の人間だから出られないじゃん！！orz

「だから、私と契約して機工魔術士になってもらいます」

機工魔術士？

何ですかそれ？

「何それ？」

「簡単に言うと魔具を作る人間です」

「魔具？」

魔力が込められた道具の事かな？

「はい。私は最上位である魔王ですから、私と契約した貴方がその気になれば、創れない物はありません！」

俺の手を握って顔を近付ける幼女^{サタン}

身長差があるから全然届いていない・・・爪先立ちして足がプルプル震えてるな

ってか、作るの字が違う気がするんですけど？・・・気のせいだよな？

「どうやって契約するんだ？」

「いくつかあります。書類による契約や・・・」

顔を真っ赤にして何も言わなくなったな
どうしたんだろうか？

「えっと、私は初めてですので痛くしないで下さいね？」

もじもじしながら言う幼女

何を言ってるんだ？

・・・なるほど

18禁か

「書類で良いよ」

「・・・わかりました」

何故か少し残念そうに言う幼女

「では、コレに名前をお願いします。名前の横に親指をお願いします

す。ちなみに血です」

幼女が空間に手を突っ込み書類を取り出した
突っ込んだ空間は波紋状だったな

「了解」

書類を地面に置いて名前を書く

「海棠 零つと」

名前を書いて親指を押し付ける・・・完了だな！

「はい」

「ふむ・・・では完了です」

書類を渡して、幼女が書類に変な力を込めた

「ッ！」

軽く右目に痛みが走った

「・・・・・・・・」

「何だったんだ？・・・どうした？」

右目を押さえながら、幼女を見ると呆然としていた

「契約をしただけなので、力は送ってないはずなのですが・・・か

なりの力を持ってますね」

・・・うん！

正直何を言ってるのか、わからない

「機工魔術士になったので、私の工房に入れます。其処で色々創って下さい」

また字が違う気がするぞ？

「そう言えば行く世界って決められるの？」

一回も聞いてなかったな

「無理ですね。ランダムです。なので力を与えます」

「機工魔術士ってのじゃないの？」

「機工魔術士は、この世界から出るための力です。今から与えるのは、別世界で生きていく為の力です」

ちよつと待て！

生きていく力って何だよ！？

死ぬかもしれないのか！？

「危険なの？」

「一応念の為だと思って下さい」

念の為か

結構心配だぞ
なら、神をも超える力だな

「ドラゴンクエスト、ダイの大冒険の双竜閃で頼む」
結構無理してるよな
大丈夫かな？

「わかりました。以上ですか？」

「かるっ！神を超える力なのに軽いな！」

「力を与えるのは簡単なのですが、自分達は使えないんですよ。だから危険視されてるんです」

力を与えても、対抗する力が無いって感じかな？

「私の場合は、貴方に付いて行くので問題ないと思いました」

「……はい？」

付いて来るって？

「付いて来るの？」

「はい。契約したので」

「……なんか詐欺られた気がする」

「基本工房の中に居ますので、邪魔はしませんよ」

どこか寂しそうに言う少女
そんな顔されたら・・・はあ、甘いな

「別に邪魔じゃないよ。それじゃあ、行くっ」

「はい！」

嬉しそうに頷く少女

「名前は？」

「サタンです。もしくはルシファーです」

それって名前だったんだ

「かいとう海棠 まお真央でいいか」

「・・・私の名前ですか？」

「嫌だったか？」

「そんな事ありません！嬉しいです」

ロケットのように跳び付く少女

こんなのが魔王だとは思えないよな

「つて！力強！」

支えきれずに後頭部から地面に倒れる俺

絶対に痛いだろうな

痛みを覚悟して目を瞑る

ポフツ！

・・・地面とは思えない弾力性だ

「って違う！」

目を開けて周りを確認する

俺が居る場所はソファー

周りは・・・工房？

上がる階段、下がる階段がある

「此処がマオの工房です！」

顔を胸に押し付けて説明してくれるマオ

「此処が・・・結構揃ってるな」

かなりの工具がある

「二階が寝室、倉庫。地下一階が栽培所や食料保管庫。二階が空き
です」

「わかった・・・もう移動したのか？」

マオが俺の上から退かないので、抱き上げて立ち上がる・・・軽いな

「はい。工房から出たら、もう別世界ですよ」

「じゃあ、行こう！」

少し心を踊らせながら、マオが繋げたゲートを潜った

此処は何処だろうか？

ゲートから出たら森の中

後ろを見たら、ボロボロの小屋があった

「なあ、此処って・・・どした？」

またもや俺を呆然とみるマオ

「ち」

「ち？」

「ちっちゃくなってる〜〜〜！」

マオが俺を指差しながら叫んだ

何を言ってるんだ？全く

一応不安だったので、両手を見る・・・小さい
良く見たらマオと同じ身長だ

「なんじゃこりゃー！」

「てか、姿が全然違います！」

そう言いながら、手鏡を渡してくれるマオ
鏡を覗き込むと、銀髪・銀眼の少年が写っていた（右眼は機工魔術
士である証拠で朱くなっていた）

「この姿って聖痕のクエイサーのサーシャじゃん！」

ツンデレ少年だっただけ？

外見年齢10歳だな

「なんで変わったんでしようかね？」

俺に聞かれても解らないよorz

「変わってしまった事はどうしようもないな・・・工房って何処で
も繋げるのか？」

此処だけだったら、色々辛いからな

「それなら大丈夫です。任意で繋げる事が出来ます」

なら平気だな

「移動しよう。こんな場所に居ても、しょうがないからな」

「ちょっと待って下さい！」

俺が歩き出すと、マオはゲートの接続を切って付いて来た

「何処に向かうんですか？」

追い付いてきたマオが聞いてくる

「正直考えてない。此処が何処で、日付も解らないからな」

だから、真っ直ぐ歩くだけ

「そうですね。私も解らないですし」

解らないんだ！

自分が送った世界なのに！

「ランダムでしたから」

「心を読みな！」

「すみません！」

ペコペコ頭を下げるマオ

本当に魔王なのかね？

「動くな」

マオと話してたら、不意に前から話しかけられた
黒髪で長身の男性だ

「零君、挟まれました」

俺の服を引っ張りながら言うマオ
マオは俺の事を零君と呼ぶらしい

振り返ったら、金髪の青年が立っている

「ふむ」

何となくだけど、2人からマオと似たような力を感じるな

「お前は何者だ？」

黒髪の男が聞いてきた

「今来たばかりだから何とも言えないな」

顎に手を当てて考えるようにする

「じゃあ、悪魔の次元から堕ちてきたばかりか」

黒髪が空中から剣を取り出して、剣先を向けてきた

悪魔の次元？

堕ちてきた？

「その子は機工魔術士だね。悪魔はそっちの女の子かな？」

金髪がマオの方を見る

「いきなり強大な力を感じて来たら、子供だったとはね」

チラツとを俺の方を見て、マオに視線を戻す金髪

「何でこっちに来た？内容によっては容赦しない」

黒髪が殺気を出してきた
何か面倒くさいなあ

第1話 機工魔術士

黒髪が、かなりの殺気を放ってくる

黒髪も金髪もかなり強いな

強敵、苦戦するとは感じるけど、恐怖や絶望は感じないんだよな

「目的って言われてもなあ・・・あえて言うなら、マオと一緒に生活するため?」

マオが嬉しそうに見てくる・・・ハズい

黒髪がさらに殺気を出してきた

金髪は様子見を続けるみたいだ

「生活するだけなら、悪魔の次元で良かっただろう」

正直悪魔の次元ってのが、解らないんだよね

「人間が住む次元より上位にある次元です」ボソツ

マオがコツソリ教えてくれた

・・・なるほど

じゃあ、頑張っって言いつつはしますか

「まあ、落ち着いて。俺が普通の人間でありながら、人間の次元と悪魔の次元の狭間に入り込んだんだ」

「狭間と言っても、次元と次元の間の次元です（狭間に入り口を開ける事が不可能なのです）」

すかさずマオが補足する
後半は念話で教えてくれた

「人間界がビルの一階なら、悪魔界がビルの三階だな。俺は二階に入り込んでしまったんだ。」

黒髪の殺気がだんだんと落ち着いてきた

金髪は、俺が狭間と言った瞬間、力が乱れたな

「人間では入り込んだんだ次元から出られなかったから、マオにと契約してもらって機工魔術士になったんだ。そして今戻ってきたばかりなんだ」

「ほう、なら新米だな」

黒髪は俺に向けていた剣を肩に担いだ

「・・・何だったら、俺達のコミュニティに入るかい？」

突然金髪から勧誘された

黒髪も驚いている

確かに仲間が出来ることは嬉しい

しかし、何か裏がありそうだ

「何でだ？」

腰を少し落として、いつでも動けるようにする

「正直、俺達よりも力が無いとは言え、敵に回したら厄介そうだからな。だったら力の使い方を知らない今の内に引き込んでおこうと

思ってたんだ」

・・・悪くはないな

仲間になれば2人の技術を得られるかもしれないしな
奪ったらその分敵が増えるし

あれ？

俺にしたらメリットしかなくね？

「わかった。その話に乗ろう」

マオが心配そうに見てきた

安心させるために頭を撫でる・・・魔王ねえ

「じゃあ、決まりだな。俺はフルカネルリだ」

金髪が自己紹介をした

「チツ！俺はパラケルススだ」

何故が不機嫌な黒髪

「俺は海棠零。コッチが海棠真央だ」

こうして俺は機工魔術士の最強クラスの2人と出会った

あれから5年が過ぎた

因みに今は18世紀だった

パラケルススからは医術

フルカネルリからは錬金術を学んだ

初めの1年くらいは、2人のパシリで満足に魔具を創れなかったな
(誤字でない)

因みに一番最初に創ったのはナイフだった

まあ、ただのナイフじゃないけどね

身体能力上昇と魔力吸収を付加させた

それからマオからは、契約以降魔力は貰っていない

この5年間は人間の次元に行かないで、悪魔の次元で過ごした

力の使い方もかなり覚えだし、パラケルススとフルカネルリが危険

視する魔具も幾つか創った(笑)

創った時、「絶対に俺達に使うなよ!」と怒鳴られたな

「コレは何処に置けば良いですか?」

マオが栽培していた薬草を持ってきてくれた

「此処に置いてくれ」

自分の近くの机を指差す

今俺は工房で新しい魔具を創っている

「何創ってたんだよ?」

壁からパラケルススが現れた

確かに俺の方が力が弱いから、入ってくる事は出来るけど・・・
— 応魔王の工房なのだがね? —

「不老不死の薬だな。マオから魔力を貰うつもりがないから、悪魔化出来ないんだよ。マオと暮らして行く為にも、不老不死の薬を創らなきゃならんからな」

「ほう、不老不死か。悪魔は不老だぞ？それなのに不老不死か」

ニヤニヤしながら言うパラケルスス

「フルカネルリは悪魔化して不老になり、お前はある意味呪いだから」

試験管をいじりながら、パラケルススと話す

パラケルススはアゾート剣の魔力に当てられて、骨になったんだよなそして、骨の状態が『普通』になった

それがパラケルススだ・・・アンデットだな

「それから、不老不死の薬が完成したら、人間の次元で暮らそうと思ってるんだ」

俺の今の考えだ

このまま悪魔の次元で暮らしても良いけど、色々面倒くさいんだよな

「そうか・・・昔は危なっかしかつたが、今なら大丈夫だろう」

驚いた！

許されるとは思わなかった！

絶対に反対されると思ったんだがな

「何だその顔は？」

パラケルススが鬱陶しそうな表情で言ってきた

「何でもない」

「まあ、お前が俺達のコミュニティなのは変わらん。好きな時に来ると良い」

うわ~~~~~！

パラケルススさんカッコいいです！！

あんた男だよ！

「アイが悲しむから、ちよくちよく着てくれや」

そう言つて工房から出て行った

「パラケルススさんは、なんだかんだ面倒を見てくれましたからね」

今まで黙っていたマオがヒョッコリ現れた・・・しっかしマオは全然成長しないな

「なんか失礼な事を考えてませんか？」

なっ！

心を読まれた！？

「そんな事無いよ。それよりも夕飯にしよう」

最後に二つの試験管の中身を混ぜてから立ち上がった

「オムライスが良いです！」

頭のアホ毛を揺らしながら言ってくる
ン千年生きてるのに、好物がオムライスってどうよ？

「先に言ってます！」

ハシヤギながら二階に向かって行った
外見通りお子ちゃまだよな

だからこそそのマオって感じもするがな

因みに俺はマオを妹みたいに接してるので、夜の付き合いはないぞ
？・・・ロリコンじゃないからな

その日は夕飯を食べてから続きを少ししてから寝た

数日後、不老不死の薬だけを創ってるのも飽きるので、武器を創る
為に材料を集めをしに悪魔の次元に出た

「マオは留守番な？材料集めは俺だけで行く」

ゲートから出て、マオに言う

「だから、そんな物騒な物は仕舞え」

何故マオは、俺が昔遊びで創ったガンランスを持ってるんだい？
因みにユクモのガンランスだ

「零君は武器を持たなくて大丈夫なのですか？」

今の俺は何も持ってない・・・ように見えるだけだ

「何かあった時は、直ぐにゲートを開いて、武器を取り出すよ」

一応マントに隠れているけど、腰にナイフがある

最初に創ったナイフだ

一番使い慣れてるんだよな

「だから安心しろ」

ガシガシと乱暴にマオの頭を撫でる

「では、気をつけて下さい」

マオは渋々ゲートを通って工房に戻っていった

「んじゃ、行くか!」

灯りも無いのに明るい洞窟の中を歩き出す

「奥から、かなりの力を感じるな」

結構強いな

それでもパラケルススやフルカネルリよりは弱いけど

冥王や竜王クラスかな?

力を奪って魔具に魔力を注ぎ込めば、強力な魔具になるな

「それにしても、邪魔が多いな」

わんさか居る悪魔の攻撃を、避けながら先に進む

力の差も解らない下級悪魔、おこぼれを貰おうと来た中級悪魔、強

敵と闘うために来た上級悪魔がいる

それらが奥に居る悪魔の魔力に当てられ、狂って殺し合いをしている

「迷惑極まりないな」

近付いてきたリザードマンの頭を、ナイフで斬り飛ばす

斬り飛ばす時に、ナイフに付加されている魔力吸収で魔力を奪う

「結構魔力が貯まったな」

柄にある宝石を見る

初めは透明だったけど、今は紅くなっている

「・・・もう素通りするか」

足に魔力を流して強化する

腰を少し落とす

「せーのっ!」

跳躍してから悪魔の頭に乗る、悪魔の頭を踏みつけながら先に進んだ

「竜王クラスだったか」

俺の目の前には東洋の龍とも、西洋の竜とも言えない竜が居る
どちらかと言うと西洋の竜だけど

腹が出ている竜では無く、ガツシリとした体

腕も人間の腕みたいに長く、足も長い

ドラゴンドライブのセンコークーラみたいだな

『狂わずに来たから誰かと思っただら・・・銀の天魔が何のようだ？』

銀の天魔

悪魔達から付けられた二つ名だ

銀は髪色

天魔は美しい容姿のくせに、絶望的な程の破壊力を持つてるかららしい

変な二つ名だね

「お前の魔力と魔石を貰う為だよ」

簡易ゲートを開いて、武器を取り出す

かなりの魔力が宿った美しい長刀だ

パラケルススやフルカネルリから危険視されてる物の一つだ

「始めっから全力だ・・・目覚めろ、飛天鳳舞！」

飛天鳳舞

付加能力は原作の『私の救世主さま』の再現だ
端から見たら俺が消えたように見えるだろうな

「ゼエエイ！」

一瞬で竜の眉間に剣を振るっ

『くっ！』

竜は反応できなかった

「それそれそれ！」

ゲートから竜殺しが付加された武器を取り出して投げつける
剣や槍などだ

『小癩な！』

竜は腕を振って叩き落とすが、量が多くて竜殺しが付加されている
ので、竜の腕に傷が出来ている

「まだまだ！」

竜が竜殺しの効果で怯んでいる時に、右目に長刀を突き立てた

『グオオオ！』

竜は耐えきれずに、俺（自分の顔面）に向かって殴りつけてきた

「来い、イージス！」

ゲートから物理攻撃『だけ』を無力化する盾を取り出して防ぐ
イージスは直径三十センチほどの丸い盾が、二枚で1つのセットで
基本浮遊している

「終わりにしてやるよ・・・目覚めろ、飛天鳳舞！そして歓喜せ
よ！」

長刀が光り出し、竜に突き立てたまま長刀の形が変わった
その姿は、まるで鳳凰が刀に変化したような姿だ

『・・・私の負けだ』

竜は負けを認めて抵抗を止めた

「……お前の力は無駄にしないよ……封剣、アルバクル！」

俺が創った魔力を封印する為だけのナイフだ

「セイツ！」

アルバクルを竜の眉間に突き立てた

その瞬間に、竜の体はアルバクルに吸われるようにして消えた

「あゝゝゝかなりの魔力を消費した」

竜が消えたら直ぐに周りにある魔石を拾う

竜が消えたから、狂っていた悪魔が正気に戻って此処に来るはずだから、速くしないと！

「退散退散」

魔石を10個くらい拾ってから、工房に転がるように入った

第2話 幼女2人目

「出来たー！ー！ー！」

ついに出来たぞ！

コレを創るのに5年もかかってしまった！

嬉しさのあまり工房でイナバウアーをしてしまった！

あれから3年が過ぎて、やっと不老不死の薬が完成したよ！

材料は基本猛毒薬で創ったから、かなり危ないけどね

「それにしても酷い色ですね」

テーブルの反対側からマオが言ってくる

確かに酷い色だ

紫色でボコボコ泡立ってるしね

「試さなきゃな」

そう言つて近くにいた子猫を抱き上げる

一年前に人間界で拾った子猫だ

産まれてすぐに、親が車にひかれて、死にかけてたから連れてきた

名前はナナ、メスだ

結構懐いてくれた

「大丈夫なんですか？ナナにもしもの事があつたら怒りますよ？」

マオが怒るとかなり怖いんだよね——

パラケルススでも逃げ出す程だ

「その為に、解毒剤も用意してるんだよ」

小さな小瓶をポケットから出して、テーブルに置く

「今解毒剤つて言いましたよね！？毒つて！」

「ほら、ナナお舐め？」

騒いでるマオを無視して、ナナに不老不死の薬を舐めさせる

「ニャッ！」

ひと舐めた瞬間、ナナが奇声をあげて倒れた

「……………」

「……………」

ナナが動かない——

だんだんとマオの魔力が膨れ上がってる
かなり怒ってるぞ

どうしよう(。。(；)

「……………苦いニャ」

プルプル震えながらナナが喋った……喋った！？

ナナが喋っただと！

どうしてこうなった？

マオも驚きで、開いた口が塞がらないみたいだ

アホ顔だし

「一応成功なのですか？」

「どうだろう？予想だと、不老不死だけの筈なんだけど」

予想外過ぎる

ナナはプルプルから、ピクピクになってきた・・・ヤバいな

「マオは一応ナナを治療液にぶち込んできて」

治療液

巨大なタンクに入ってる緑色の液体だ

疫病や毒『だけ』に有効な液体だ

だから外傷やガンなどは、直せないんだよね

「わかりましたっ！」

マオが慌ててナナを抱き上げて、地下二階の治療室に走っていった

・・・この薬飲んでも大丈夫かな？

語尾が『ニャ』にならないかな？

実は『ワン』になったり？

「考えててもしょうがないか・・・よしっ！飲もう！・・・ウツ！

」

覚悟を決めて、不老不死の薬を飲み干した

・・・痛い

何でだ！？甘い、すっぱい、辛い、苦い等ではなく痛いだと！？

ナナは苦いって言うてたのに！？

人間と猫では効果が・・・味が違うのか！？

とにかく意識が薄れてきたな
最後に倒れる前に解毒剤を飲んでから倒れた

「零、起きろ！」

「ゲブツ！」

堅い何かで頬を殴られて眼を覚ました

「イテーじゃねえか！ホネツ！」

目の前にパラケルスス（骨バージョン）が居たから、コイツが拳（骨）で殴ったんだな#

「ああん？お前が泣きべそのマオに抱えられて、診療所に来たから助けてやったんだろうが！」

パラケルススが文句を言いながら、俺を診療する
どうやら俺はパラケルススの診療所のベットに寝てたらしい

「戻ったら零君が、変な踊りをしてたんですよ。そしたらいきなり倒れちゃって」（涙）

チラッとマオを見たら説明をしてくれた
まだ涙目だ

かなり心配させたみたいだな

「・・・お前何をしたんだ？」

俺を診療していたパラケルススが、真剣な表情（骨だが）で聞いてきた

「不老不死の薬が出来たから、飲んだんだ。それが意外にも痛くて直ぐに解毒剤を飲んだんだよ」

あつてるよな？

かなり意識が朦朧としてたから、自信は無いけど

「多分不老不死の薬で身体を創り変えてる時に、解毒剤の強力な反発作用で変に身体が創り変えられたんだろうな」

不老不死になる途中で、解毒をしたから本来の不老不死では無く、亜種の不老不死になったって事かな？

ベットから身体を起こして、パラケルススと向き合う

「こんなのは始めてだが・・・名付けるとしたら、不老不滅だな」

不老不滅？

なんだそれは？

「不老は解るだろ？」

「ああ、歳をとらないって事だな」

「不滅は滅びないって事だな」

「そんぐらい解るわ！」

ドヤ顔で言うパラケルスス
骨だけど

「お前を原子まで殺しても、破壊しても絶対に死なないって事だ」

「不死とは違うのか？」

「不死つてのは細胞を活発にさせて事故修復するんだ。だから原子単位で殺されたら修復出来ない。一般的に言われている不死殺しがそうだな」

なるほど

正直よくわからない

「魔力や気は増えたりするのか？」

「それは問題無さそうだな。努力次第では底上げ出来るだろう」

なら、今までみたいに修業する事が出来るな

「因みに零の血は万能薬だな」

「・・・へ？」

今何て言った？

万能薬だと？

「何変な顔してやがる。お前は不滅なんだぞ？そんな奴の血にも不滅の能力がある。それが万能薬って事だな。大量に飲めば不老不死になるだろうな」

俺が混乱してたら、パラケルススが説明してくれた
そして俺の視界の隅で注射器を準備している女の子が居る
パラケルススの娘（多分）のアイちゃんだな

「つて！注射器！？」

「別に良いだろ？治療料だ！」

「痛いのはイヤだぞ？」

「ハハハ、マカセロ」

ブスッ

「片言！　　ッ！」

痛すぎる！

パラケルススは注射が下手だった！

因みにずっと静かだったマオは、泣き疲れて寝てた

俺が不老不滅になって1ヶ月過ぎた時に、人間の次元に来た
人目が無いように、始めてコッチの世界に来た時と同じ場所に降り

立った

「懐かしいな」

「そうですね。あれからまだ八年しか過ぎてないんですよ？」

かなり昔だった感じがするな

ボロボロの小屋の前には、俺とマオしか居ない
ナナは工房でお留守番だ

「これからどうするんですか？」

「19世紀からは、新世界で過ごす。それまでは旧世界で過ごす
と思ってる」

「そうですね。それが良いでしょう。何で移動しますか？」

「時間は沢山あるんだから、歩いて移動する」

「わかりました」

元気良く先を歩くマオ

マオは全然変わらないよな

まあ、それで良いんだけどね

マオの後に続いて歩き出す

ドゴオオオオン！

・・・一歩踏み出したら、爆発音が

何か嫌な予感がするな

「何かあったようですね。どうしますか？もしかしたら怪我人が居るかもしれませんが？では行きましょう！」

・・・自問自答

俺に意見を聞いてきたのに、自分で決めたね

本当に嫌な予感がするんだよな

具体的には、旅のメンバーが増えるみたいなの？

しかもツンデレで吸血鬼などの人間の次元での最強種みたいなの？

先に進むマオを追って爆発が起こった方向に向かった

side エヴァ

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

何とか倒したな

高位魔法使いが10人、悪魔が15体、不死殺しの武器を持った戦士が20人

かなり危なかったぞ

「ご主人ボロボロだな」

「お前もだろうが」

横で右腕、左足を失った従者のチャチャゼロが倒れている

「派手に暴れたから、早く移動しないとな」

チャチャゼロの頭を掴み、ヨロヨロと歩き出す

魔力を使い果たした為、回復に回す魔力がないな

ほっとしても死にはしないが、見つかったら終わりだ

「ニゲテルトキニ、ぼろぼろノコヤヲミツケタナ」

チャチャゼロの言う通り小屋があったな

アソコで少し休むか

ガザ

「っ！」

生き物の気配だ！

まだ遠いかなりのスピードで近付いて来ているだ！？

まさか増援か！？

「ご主人！」

「解っている！」

クソッ！

このスピードだと逃げることも出来ないな
どうする！？

「あ~~~~居ましたよ~~~~」

そんな声と共に頭上から私と同じ体型の幼女が降ってきた
・・・さらにスピードを上げて一瞬で来ただと？
外見と違つて、かなりの魔力を秘めているな

「クツ」

敵は1人

今出せる最大の魔法を凶にして最大速で逃げるしかないか？

「つたく、いきなり止まるなよ。追い抜いただらう？」

不意に後ろから銀髪の男が現れた

此処まで接近するまで気が付かなかっただど！？

それにこの男の魔力量は！・・・こんな2人から逃げる事など無理
だな

「吸血鬼か」

男が私を見ながらそう言った

やはり奴らは私を殺しにきたのか

「・・・チャチャゼロ。すまない」

「・・・キニスルナ。ご主人」

チャチャゼロには悪い事をしたな

「クツ！さつき考えたのはフラグだったのか」orz

いきなり男が膝から崩れ落ちた
いったい何だったんだ？

第3話 キティとチャチャゼロ

「イタツ・・・ツ・・・痛いわ!!」

森の中で出会った少女の治療をしてたら、少女に怒鳴られた

「消毒液で喚くなよ。一応最強種のバンパイアだろ？」

まあ普通の消毒液じゃないからな

普通の傷は不死力で治るけど、不死殺しが付加された武器での傷は治りが遅いからな

「それに貴様は何者なんだ!?それにこの場所は!？」

うるさい奴だな

少女が言った通り、人目が無い方が良くと考えて工房に移動した
少女が持っていた人形は、マオに預けて修理中だ

「少し黙れよ。此処に入れるのは、俺とマオだけだ。それ以外の人物が入るには俺か、マオが連れ込まないと来れないからな・・・だから警戒するな。少し休むと良い」

そう言っつて、少女にお茶を渡す

ずっと警戒してるからな

まあ、得体の知れない俺達だから当たり前だけどな・・・お茶は素直に受け取ったけどな

「・・・ふう、まずはお前の名前は？」

お茶を飲んで落ち着いたみたいだな

「俺は海棠零だ。何者かは・・・言わん」

「何故だ!？」

「名前も知らん奴に教えるわけが無いだろ？」

お茶を飲みながら答えた

幼女が俺を得体の知れない奴と思っているのと同じように、俺も幼女の事を得体の知れない奴と思ってるからな

「因みに助けたのは気まぐれだ」

本当の理由は、パラケルススの治療してる姿が格好良かったから、なんて言えるわけがないからな・・・ハズいし／＼

「・・・私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・・・知らんな

有名なバンパイアじゃないみたい

かなりの有名なら悪魔の次元にまで広がってるはずだからな

「無名か？」

「なっ!!! 私は『闇の福音』だぞ!」

確認したら怒鳴られた

闇の福音ねえ

そう言えば、パラケルススが頑張ってるロリがいるって言ってたな
確か名前は

「・・・キティだったな」(ボソッ)

「何故その名を!!」

キティの方が有名なんだよな

「俺が住んでた場所で結構有名な名前だ」

何体もの悪魔が契約しようとして、返り討ちになったからな

その人間がキティだったな

人間なのに大量魔力を持つって言うてたし・・・まさかバンパイアだったとはな

「何故キティが有名に」orz

何で少女は落ち込んでるんだ?

「ご主人ノA・KノKハ、きていナンダヨ」

人形がボロボロのまま現れた・・・マオが押すカートに乗って

「修理してたんじゃないのか?」

マオがカートを隣の置いたので、人形を見ながら聞く

「長い年月の激しい戦闘で、間接部などの基礎部分が駄目になって
ますね」

「なるほど、墓が駄目ならもう無理か。もう全て変えちゃうか？キティの魔力で自己修復するように」

「何！？そんな事が出来るのか！？……ってかキティって呼ぶな！！」

幼女・キティが俺の胸倉を掴んできた

「落ち着けよ、出来るよ。有料だけだな（笑）」

「なら頼む！」

キラキラした目で見てくるキティ

お前って研究者だろ？

確かそう聞いてた筈なんだけど？

悪魔が危うく解剖されそうになっただって言ってたし

「金払えんの？治療代もだよ？」

ガシツと両方から顔を挟んで聞く

あつ！目を逸らしやがった！

「今、持ち合わせがない」

「何？金が払えないのか？だったらしょうがないな」

「なんだ？タダでいいのか？気前が良いな！」

キティは何を言ってるんだ？

金がないなら、一つしかないだろう
キティを抱きかかえる

「な、何をする!？」

「金がないなら体で払って貰うしかないな」

「なんだと!は、離せ!!」

キティがバタバタし始めた
体力、魔力が切れかかっているから、体型と同じ子供並みの力しかないんだな

「真央は、人形を頼む・・・ほれ」

「イタツ!何故髪を抜いた!」

キティから髪の毛を一本抜いて、真央に渡した
自己修復用の魔力の設定をするために主の体の一部が必要だったからな

「1時間で完成させてきます」

真央がカートを押して部屋から出て行った

「次はキティの番だな」

「な、何をさせる気だ?・・・わ、私はずっと逃げ回る生活をして
いたのだ。だ、だから経験が無い。や、優しくしてくれ」／／／

キティがモジモジしながら、消えそうな程小さな声で話す
つてか、キティって呼んでも反応しなくなったな

「激しいだろうけど、吸血鬼なら問題ないだろ・・・そう言えばエ
ネルギー切れだったな」

「ちよっ！だから私は！」

キティを抱き抱えながら、薬品のある棚まで移動する
瓶の中にある錠剤を一粒取り出し

「あーん？」

「あ、あーん」／／／

キティに飲ませた

「むっ？これは？」

「体力と魔力が回復したな？ならもう大丈夫だな」

ニッコリ笑いながらキティに言う

そして壁に手を当てて扉を接続させる

「じゃあ、頑張ってこい」

「・・・え？あれ？」

キティを下位のダンジョンに放り込んだ
俺は顔だけ出して

「1時間後迎えに来るから、鉱物や魔石を集めとけよ？」

それだけ言うと扉を閉めた

閉めた時のキティの顔がアホ面だったな

第4話 別れ

side エヴァ

「くそっ！」

何なんだこの場所は！！

見かけは洞窟なのに、あっちこっちから魔力の気配がするぞ
しかも此処には悪魔しかいないのか？

・・・無駄に対魔力が高すぎて魔法の矢では全然効果がない
だから飛行して悪魔達から逃げている

「あんな奴らが居るなんて聞いてないぞ！！」

始めはあまり採れない鉱物が沢山採れたから良かったのだが、
分もすれば悪魔達に囲まれていた 30

「もうそろそろ時間だろう！早く助けにこんか！」

叫びながら角を曲がった

その先は行き止まりだった

しかも止まらない！

「くっ！」

壁にぶつかる衝撃に備えて目を瞑った

side 零

時間になったのでダンジョンの中を搜索してキティを捜し出して扉を開いた

「おっと！」

その瞬間にキティが勢い良く工房に飛び込んできたので受け止める薬品とかに突っ込んだら大惨事だからな

「はあ・・・はあ・・・」

結構息が乱れてるな

汗びっしょりだ

金髪が汗で額に張り付いてる

目立った外傷は見当たらないな

「お疲れさん・・・ジツとしてるよ」

濡れタオルでキティの額や頬、首筋などを拭ってあげる
冷たいのではなく、少しぬるい感じの濡れタオルだ

「んっ・・・はあ・・・っ！」

少しバタつきながらも、素直に拭かれるキティ

「疲れたんだな。今飲み物を出してやる」

キティを抱いたまま濡れタオルと同じく、ぬるいスポーツドリンクが置いてある所まで移動する

悪魔の次元にスポーツドリンクなんて無いので、俺の記憶で作った飲み物だ

癒しを付加してあるから効果は抜群だぞ？
移動中にキティの頭を優しく撫でてあげる
そしたらキティは若干心地良さそうに目を細めた

「ゆっくり飲めよ？寝る場所を用意してあるから今日はもう休んだらどうだ？」

スポーツドリンクを渡しながら聞く

「んくっ・・・んくっ・・・」

キティは両手でしっかりとコップを持って飲み始めた
そう言えばキティ手ぶらだな・・・ちゃんと鉱物・魔石採ってきてるよな？

「鉱物・魔石は？」

ウトウトし始めたキティに聞く
キティは目が半開きのまま、懐に手を入れて、バスケットボールくらの袋を取り出した
ちゃんと採ってきてたな

「おーい、真央！」

「はーい？」

二階からパタパタと真央が降りてきた

「彼女を寢室に。ゆっくり休ませてあげてくれ」

「わかりました」

キティを受け取った真央が元気良く階段を上って行った・・・真央とキティって同じくらい背丈なんだな
同世代の子を一生懸命運んでる感じだね

「さて、キティはどんなのを採ってきたのかな」

ウキウキしながらキティの採ってきた鉱物をあさった

鉄・鋼・金・白金・亜鉛などなど

・・・人間の次元でも手に入る物ばかりだ

魔石は氷と酸が封じられた物だけだ

特に良い物はなかったな

袋から取り出した鉱物などをしまってからソファーに横になった
唯一のベットをキティに貸してるから、寝る場所がないんだよね

キティを助けてから80年が過ぎた

飛びすぎだね（笑）

特に特別なイベントが無かったので割愛させてもらう！

「反応が薄いな」

んで、只今新しい魔具を製作中だ

フラスコの中の反応が弱い・・・失敗だな

「コッチも弱いな」

俺の横でフラスコを睨み付けるキティが言うてかさ……

「お前いつまで居るの？」

始めは借金返済の為に鉱物などを採りに行かせてたけど、最近は助手だよ

意外に真央と意気投合して、自分の部屋まで作っちゃってたし

「なっ！……わ、私が居ては迷惑か！？」

俺の胸にしがみつきながら聞いてくるキティ

「なんで当たり前に暮らしてるのかだよ。始めは借金返済の為に生活だっただろ？」

「うっ！……確かにそうだが……」

「零くん！エヴァちゃんを虐めないで下さい！」

地下から上がってきた真央に怒られた

……俺が悪いのか？

「いや、俺達はそろそろ魔法世界に行くつもりだから……前に話しただろ？」

キティに会った日だな

「……そうでしたね」

「だから、魔法世界に来ればいつでも会えるから。今みたいに住居が無い生活じゃなくて、ちゃんと家を買っからな」

「今までは家の代わりに工房だったからな」

「キティは工房に任意でないと入れなかったからな」

「一つの場所に留まるのか？」

「そうだ。闇医者として生活する・・・特に今までと変わらないな」

「今までも旅先で医者みたいな事をしてたからな」

「キティが考える素振りをする」

「わかった。だったら私はまた旅に出る」

「いつでも遊びに来て下さいね！」

「真央が涙目でキティの手を握った・・・なんか罪悪感が」

「住所は決まったら念話するよ」

「出来るのか？どこに居るのかわかるのか？」

「普通の人には無理だよな」

「でも俺って魔王と契約してるんだよ？」

「神と同格だよ？」

「出来ない事ってほとんど無いんだよね」

「安心しろ。最悪扉を開いて教えに行くから・・・真央が」

親指で真央指す

「私ですか!?!」

魔王と契約してる俺よりも、魔王本人の方が良いでしょ?

「だからいっぱい遊んでこい。怪我したら見てやるよ」

ガシガシと乱暴にキティの頭を撫でた

「子供扱いするな!」

キティが回し蹴りをしてきたので、下がって避ける

若干キティの顔が嬉しそうだったのは見逃さなかったぞ!

それから大切な物だけ持ってキティは出て行った

また真央と2人の生活だな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601t/>

最強の保険医

2011年8月11日19時57分発行